(2)は文字の左端が若干残るのみであり判読できない。

（1～7　清水康二
8　和田　萃・鶴見泰寿）

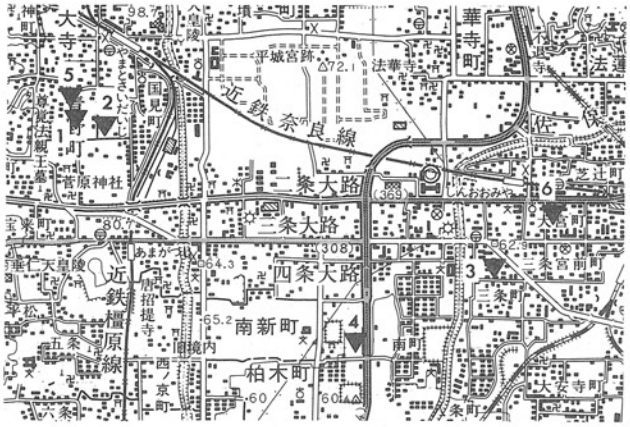
(1)

(2)

奈良・平城京跡

1　所在地　一・二　奈良市菅原町、三　同市三条栄町、四　同市柏木町、五　同市青野町、六　同市大宮町三丁目

2　調査期間　一　一九九四年（平6）四月～九月、二　一九九四年六月～一九九五年三月、三　一九九四年一〇月～一二月、四　一九九四年一一月～一二月、五　一九九四年一二月～一九九五年三月、六　一九九五年一月～二月



3　発掘機関　奈良市教育委員会・奈良市埋蔵文化財調査センター

4　調査担当者　一　中井公・久保邦江・原田憲二郎、二　中井　公・

鐘方正樹・久保邦江・原田憲二郎・久保清子、三松浦五輪美、四　立石堅志、五　中井　公・原田憲二郎、六　篠原豊一

5　遺跡の種類　都城跡

6　遺跡の年代　古墳時代～平安時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九九四年度、奈良市教育委員会では平城京内において、三二件の発掘調査を実施した。そのうち六件から木簡が出土した。

一　第二九二次調査（平城京右京二条三坊十一坪）

この調査は、近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴うもので、二カ所の発掘区を設定して実施した。発掘面積は計三三〇〇㎡である。

検出遺構には、古墳時代中期の溝一条、奈良時代の掘立柱建物一九棟、掘立柱塀二条、井戸五基、平安時代の掘立柱建物三棟、井戸二基、土坑がある。木簡は平安時代の井戸SE五〇七井戸枠内から一点出土した。

二　第三一〇次調査（平城京右京二条三坊三・六坪）

この調査は、近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴うもので、三カ所の発掘区を設定して実施した。発掘面積は計五一〇〇㎡である。

検出遺構には、古墳時代の溝、古墳、奈良時代の三・六坪坪境小路とその両側溝、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱塀・建物一五〇棟以上、井戸二五基、土器埋納坑三基などがあるが、現在遺物整理中であるため、その全容は不明である。木簡は奈良時代前半の井戸SE〇八井戸枠内から二点出土した。

三　第三一四次調査（平城京左京四条三坊十坪）

この調査は共同住宅建設に伴うもので、発掘面積は一一七八㎡ある。

検出遺構には、奈良時代の掘立柱建物四棟、掘立柱塀二条、井戸三基、土坑七基、溝九条と東堀河（SD二六）がある。このSD二六は平城京内で確認された東堀河の北限である。木簡は奈良時代の井戸SE〇七井戸枠内から二点、東堀河（SD二六）から三点出土した。

四　第三一六次調査（平城京左京五条一坊十五坪）

この調査は、住宅展示場造成に伴うもので、発掘面積は三六〇㎡ある。

検出遺構には、奈良時代の東一坊大路とその西側溝、築地、雨落溝、掘立柱建物一棟、土坑がある。木簡は東一坊大路西側溝SD〇二から九点出土した。

五　第三一七次調査（平城京右京二条三坊十坪）

この調査は、近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴うもので、発掘面積は一三〇〇㎡である。

検出遺構には、奈良時代の二条条間路とその両側溝、掘立柱建物九棟、掘立柱塀二条、井戸二基がある。木簡は奈良時代の井戸SE五〇一の井戸枠内から二点出土した。

六　第三二〇次調査（平城京左京三条四坊七坪）

この調査は、共同住宅建設に伴うもので、発掘面積は四五〇㎡ある。

検出遺構には、奈良時代の掘立柱建物四棟、井戸一基、土坑がある。木簡は奈良時代の井戸ＳＥ〇一の井戸枠内から一点出土した。

8　木簡の釈文・内容

一　第二九二次調査（平城京右京二条三坊十一坪）

井戸ＳＥ五〇七

(1)　・「菅原寺」（曲物底板外面）
　　・「□原□」（曲物側板外面）　菅寺カ　　器径153×器高(37)　061

(1)は、平安時代の井戸枠内から出土した円形曲物容器で、外面の二カ所に墨書がある。底板（厚さ八㎜）外面には「菅原寺」と記す。曲物側板には三文字の墨書（図Ａ・Ｂ・Ｃ）が等間隔にある。側板の上半を欠損するため「原」以外の二文字はわかりにくいが、底板と同じように「菅原寺」と書かれていたものであろう。

二　第三一〇次調査（平城京右京二条三坊三・六坪）

井戸ＳＥ〇八

(2)　□　091

(3)　□　(40)×(6)×(2)　081

(2)(3)ともに奈良時代前半の井戸枠内から出土した。(2)は二文字程度の墨書がある。(3)は板小片に薄く墨書が残る。

三　第三一四次調査（平城京左京四条三坊十坪）

井戸ＳＥ〇七

(4)　□　(42)×(11)×6　081

(5)　□　(80)×(18)×1　081

(4)(5)は奈良時代前半の井戸枠内から出土した。共に墨書らしきものがあるが、削られたためか判読できない。

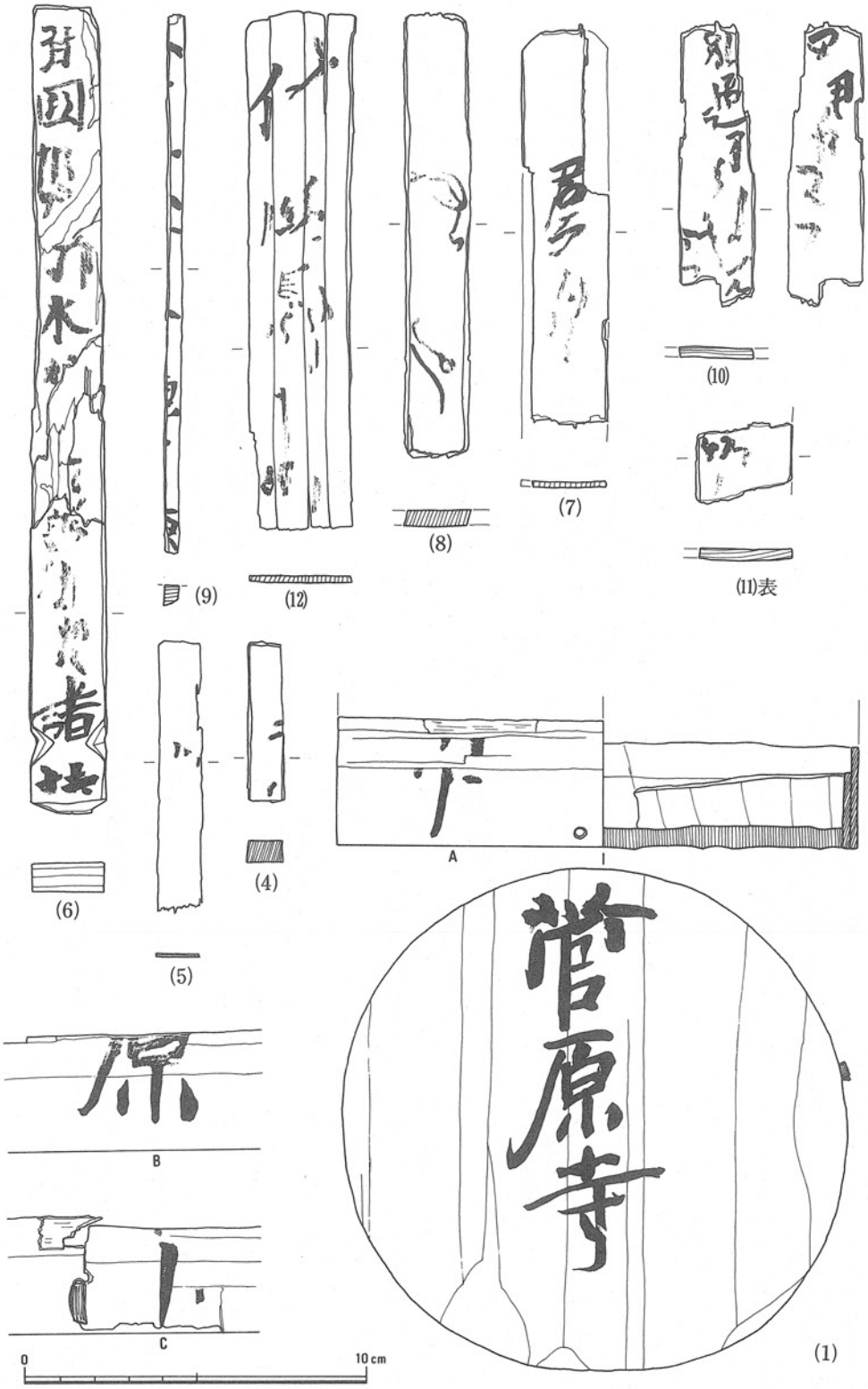
東堀河ＳＤ二六

(6)　背国□□□水□□□□□□請□<」　相楽郡カ　請カ　239×20×8　032

(7)　<□君万呂□□　(112)×(25)×2　039

(8)　□□　(130)×(17)×5　081

(6)は付札で山背国相楽郡水泉郷（『和名抄』）からのものか。同郷は『続日本紀』宝亀元年十二月乙未条には「出水郷」と見える。上端は二次的切断、下部の切り欠きより下は「請」の文字を習書する。(7)は木簡の中央に「君万呂」と人名が書かれているが、その上下を


(1)
(4)
(5)
(6)
(7)
(8)
(9)
(10)
(11)表
(12)
A
B
C
0
10 cm

判読できないため内容は不明である。(8)は片面に薄い墨書があるが判読できない。

四　第三一六次調査（平城京左京五条一坊十五坪）

東一坊大路西側溝ＳＤ〇二

(9)　□□□□□　(160)×(5)×7　081

(9)は細長い棒状の一面に墨書が良く残る。判読できないが下の二文字は同じ文字である。西側溝からはこの他に削屑が八点出土したが、いずれも小片で判読できない。

五　第三一七次調査（平城京右京二条三坊十坪）

井戸ＳＥ五〇一

(10)　〔忍ヵ〕・□　忍　忍　忍　(83)×(26)×3　081

(11)　・□□□　・□□□□　(23)×(28)×3　081

ともに奈良時代後半の井戸枠内から出土した。(10)は表裏に「忍」を習書したものと考えられる。(11)は片面に四文字、もう一面に一文字の墨書があるが判読できない。(10)(11)は材質と調整からみて同一個体の可能性がある。この他に墨書がある独楽が一点出土した。上面と側面に墨書があるが判読できない。

六　第三二〇次調査（平城京左京三条四坊七坪）

井戸ＳＥ〇一

(12)　□□□□□　(152)×(30)×2　081

奈良時代の井戸枠内から出土した。ほぼ四片に割れた薄板の片面に五文字の墨書があるが、判読できない。

9　関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成六年度』（一九九五年）

（篠原豊一）